広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	”はず”の思考がいつ生まれ、どう育っているか ： 『さるのさんぱつ』を通して
Author(s)	松村，実葉枝；飯住，良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 4 : 39 - 50
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045049
Right	
Relation	

資料

ざるのさんぱつ

（一年下巻光村図書出版）

かにが、どこやをはじめました。
みせに、大きなかがみを、すえました。
さるがさんぱつに、やってきました。あしたはさるの、たんじょう日です。
みせをのぞいて、
「おきゃくがあるんだな。またされては、かなわない。」
といって、かえっていきました。
さるは、かがみにうつったじぶんのかおをみて、おきゃくだとおもったのです。
かには、おきゃくがこないので、ぶくぶくと、シャボンばかり、といていました。
こんどは、べつのさるが、きました。あしたは、さっきのさるのたんじょういわいに、いくので、ひげをそりにやってきたのでした。
このさるも、かがみに、うつった、じぶんの、かおをみて、
「おや、おきゃくがまってるな。」
といって、かえって、いきました。
ともだちのさるが、つぎから、つぎから、やってきて、かがみを、のぞいては、
「おや、おきゃくが、まってるな。」
といって、かえって、いきました。
つぎの日の、たんじょういわいに、さるたちは、みんな、ひげを、もじゃもじゃさせて、あつまって、きました。
「おやおや、それでは、きのうの、どこやの、おきゃくは、だれだろう。」
さるたちは、くびをかしげながら、テーブルにつきました。目をぱちぱちさせながら、スープで、ひげを、ぬらしはじめました。

（よだ　じゅんいち）

児童言語生態合同調査・研究報告

〝はず〟の思考がいつ生まれ、どう育っているか

—『さるのさんぱつ』を通して—

松村　実葉枝ほか

その一

松村　実葉枝

資料の適用

この物語の面白さには、次の二点が考えられる。まず第一に、かがみを見たさるたちが、自分を他のさると間違えたのを最後迄気付かないことである。次には、このように愚かではあるが、『他の者を見たのであるから、当然さんぱつしたものがいる。それなのに、誰もさんぱつをしていない。それでは、あの客は誰だったのか』に至る。さるたちの思考過程を認められることである。但しこの場合、誕生日に招待されたのが、その山のさるたち全員としなくてはこの論は成立しないので、文中の「みんな」を「この山のさるたち全員」と限定しておく。

先客があったとするさるたちの前提は誤まったものであるから、その上に立てられた論理も、結果的には誤りとなる。しかし、さるたちの思考過程そのものは、正しい推論である。

つまり、鏡に写った自分をお客に見まちがえたおろかしさがおかしいとするよりも、それに気がつかないために起った矛盾をさるたちが解こうとすることが、この物語のおかしさである。そのためには、読者は、さるたちが鏡を知らないためという理解と、一方で

では、さるたちの思考過程（だれかこの中にきのうの客がいるはずという）推論を肯定することが行われなければならない。また推論の根底は、全員がひげもじゃで集まったので、疑問が生じたのであるから、そこには「全体と個の関係」を利用した思考がさるたちに働いていることを読者は先に知っていなければならない。

この作品の持つ二重構造性が子どもたちに把えられるかどうかということであり、別のことばで言えば〃設定〃の論理が子どもたちに出来上っているかどうかに関してこの資料を扱う。

授業の展開

話の中にさるたちの推論を見つけ出せるか否かを知るために、話を二つに分けてみる。前半(1)は、さるたちがとこやに出掛け、次々と帰るまで。後半(2)を、次の日の誕生祝いでのさるたちのようすとする。この二場面を強調するために「二ページの絵本」と称して黒板上で本作りをする。

絵を見せながら話して行き、重点的な「おや、おきゃくがあるんだな。またされてはかなわない」のことばカードを置く。 イ

二ページ目では、さるたちが不思議がっている様子を伝える。その後ロのことばカードにさるたちの言葉を入れさせる。これには「おや、おや、それではきのうのとこやのおきゃくは、だれだったろう」が入る。答えが出て来にくい場合には「おや、おや」「それでは」と少しずつ提示し、「それでは」が前の状態を受けていることも教える。

とこやでかがみを見るさるの絵
イ

たんじょういわいでのさるたちのようすの絵
ロ

最後に、各々の答えが、さるたちの論理としてどうかを考えさせる。

授業の記録

○「きょうはね、みんなに絵本
生徒「ハアーンッ」
○「絵本を作ってもらいます。」
生徒「エーッ、きのうの絵本？」
○「きのうイソップの絵本見たでしょう。おぼえてる？　あの絵本はね、全部同じ一つの特徴、ってわかる？」
生徒「知らない」
○「特に変わったところ、があるの。何のお話と、何のお話がありましたか？」
A「ライオンのお話とね、うそつき子どもと、ありときりぎりすと、ねこときつねと、おしゃれなからす」
○「もっとなかった？」
B「ハイ、金のおのと、わかんない」
○「金のおのと、それから」
C「はとがありを助けて、ありがはとを助けるはなし」
○「それからね、えーとね、ひつじかいの話」
D「それうそつき子ども」
生徒「出たよ」
A「うそつき子どもね。きのうのお話は、全部で七つあったけれども、先生、絵を見ながらお話ししたでしょう。絵は何枚あったか、ちょっと考えてみて」
○「全部何まいの絵でできていたの？　きりぎりすのお話だったら夏と」
生徒「一まい、二まい」
生徒「冬」
○「うそつき子どもは？」
A「ひつじかいのうそつき子どもとそれから、おおかみが出てきちゃったの」
○「きのうの絵はみな二枚の絵でできた絵本だったの。きょうはねみんなに二枚の絵でできた絵本を作ってもらうの」
生徒「二枚の絵？」
○「ほら、ここに二枚あるでしょ」
（黒板に裏返しに貼ってある絵を示す）これはかくしてあるの、あとですこーしずつ見せてあげる。さあ、きょうのお話は、先生が、お話していきます。それでね、このお話の途中で、無いところがあるの。それをみんなで考えてほしいの」
生徒「ハーイ」
○「いいですか。

あるお山がありました。トンカチ山といいました。トンカチ山のかにさんが、ブクブクブクーッととこ屋をはじめました。かにさんは、店に、立派な鏡を置きました。（一枚目の絵を見せながら）青いズボンのさるがとこやにやって来ました。あしたは、このさるのお誕生日ですので、山のおさるたちみんなを招待して、お誕生パーティをします。だから、ちょっときれいにしようと思って、おひげをそりにやってきたのです。青ズボンざるはやって来て、お店の鏡をのぞきました。『おや、お客があるよ。待たされてはかなわない』と言って帰って行きました。青ズボンざるは、鏡の中の自分を、ほかのお客とまちがえてしまったのです。その次に、黄色いセーターのさるがやって

来ました。このさるは、あした青ズボンざるのお誕生パーティに招待されているので、ちょっときれいにしておこうと思っておひげをそりにやって来たのです」

生徒「ウーンウン」

○「それがまたお店の鏡をのぞいて『お客が待っているよ、待たされてはかなわない』と、帰っていきました。その次に、赤いシャツのさるが来ました。このさるも、お店の鏡をのぞいて『お客があるんだな。待たされてはかなわない』と言って帰っていきました。こうして、次から次からさるのお客がやって来て、みんな、どうして、おさるさんばかり来るの？」

生徒「さるの誕生日だから」

○「あしたは、さっきの青ズボンざるの誕生日でみんなが招待されているからね」

生徒「何て山？」

○「トンカチ山でした。さあ、こうして、おさるが次から次からやって来て、お店をのぞいては、『おやおや、お客があるんだな。待たされてはかなわない』といって帰っていきました。

ここに絵本があります。絵本には、絵とことばがあるでしょう（絵の下に『お客があるんだな。またされてはかなわない』のことばカードを置く。）

さあ、次の日です。青ズボンざるの誕生日です。さるたちは青ズボンざるのうちに集まってきました。全員、ひげもじゃです。さるたちは、首をかしげながらテーブルにつきました。

（二枚目の絵を見せる）そして、おかしいな、と思いました。おひげをスープでぬらしながら、お誕生会がはじまりました。

おさるさんたちは、なにを、おかしいなあと思ったのでしょう」

D「ああいうふうに書くの、かんたんだよ」

○「そう、かんたんかな、むずかしいと思うけど」

D「かんたんだよー。もうわかっちゃったよ考えが」

○「それを紙に書いてちょうだい、そして、そのあとで読んで下さい。ちょっと、考えをまとめてね。いいですか。おさるさんはなにが不思議だったのでしょうか。Aちゃんは Aざる、Bちゃんは Bざるになって、さるの気持で書いてね」

E「Eざるってかくぞー」

○「おさるさんは、なにが不思議だったのかなー」

（二分）

○「おさるになったつもりで書くのよ」

Q「ちがう？」

「できた」

○「ここに入れたらいいことば。さあ、いいですか。できた？」

生徒「まだ」

○「さあ、おさるたちは、何が不思議だったのでしょうか」

A「ハイ」

○「では、鉛筆を置いて下さい。書けなかった人は、口で言ってね。いいですか。さあ、おさるたちは何が不思議だったのかしら。ここに入ることばは何でしょう」

E「おひげをそらなかったから。Eざる（板書）黄色にしましょう」

A「ちょっとまって。これへんだ」

○「そう、へんだと思ったら直して」

生徒「同じことだ、ぼくと」

○「みんな、ひげをそってこなかった、ふしぎだなー。これと同じ人、ほかにいない？　じゃあ『ひげをそってこなかった』のほかに不思議だなと思ったことは？」

B「あのね、うんと、うんとね、さっき行ったさんぱつやに、同じ洋服着たおきゃくがいたから」

○「さっきのさんぱつやかナ」

B「今行ったさんぱつや」

○「今行った。いつ行ったのかナさんぱつやさんには」

生徒「きのう」

B「きのう行ったさんぱつやさんに同じ顔して」

B「同じ洋服着たさるがいた」

○「それが不思議だなって、スープをのみながら思ったの？」

B「ウーン」

○「いつ気がついたの？」

B「スープたべたとき」

○「きのうのことを思い出したのね良い？」

（板書）

生徒「ハイ　」

○「ちょっと待って。きのうのさんぱつやに同じ顔をして、同じ洋服のさるがいた」

A「ハイ　」

B「Eちゃんと同じかナー」

A「とこやにいたのにね。だれもそってくる人がいないし、おきゃくがいるのにだれもひげをはやしているからおかしい」

○「みんなひげをそってこないし」

A「おきゃくがいるの」

○「みんなひげをそってこないし、

おきゃくがいるのに？　おきゃくはいついたの」

A「きのう、さんばつやにいたのに誰もそってくる人がいない」

○「だれもそってくる人」

A「そってくるさる」

○「そってくるでいいかな」

A「ああそーだ、そってきたさる」

○「そってきたさるが、誰もいないから」

G「みんな、かがみを見て、同じ洋服だったから」（板書）

○「ねえG君、この中で、似たのはない？（板書してある前述のを示す）みんな、G君が今『かがみを見てみんなおんなじ洋服着ていたから、スーブをのみながら不思議だなーと思った』っていいました。この三つをよく見て」

生徒「同じ、ハイ　」

生徒「黄色のBちゃんと同じ」

生徒「似てる」

○「G君、それで良い？　では、Gとしておこう」（EにGを加える）

○「じゃあ、他の人は？　Cちゃん」

C「ひげがあるので、そってくれば良いのにそってこないからおかしいな。どうしてそってこないとおかしいの」

C「あのね、ちょっとおしゃれしてくれば良いのに」

○「おしゃれしてくれば良い。みんなちょっと考えて。Cちゃんはね、お誕生日にまねかれたのにおしゃれしてくれば良かったのに、ひげをそってこないのはおかしいよ、そう思ったんですって。でも、Cざるさんは、とこやへは行きませんでしたか」

生徒「行った」

○「おさるは、全然おしゃれをする気はなかったの？」

生徒「思った」

F「でも、おきゃくがいたから」

○「でも、おきゃくがいたから」

B「かがみがあるって知らなくて、行かなかった。だから」

○「かがみがあるって知らなくて、行かなかった。じゃあ、Cざるさんは、おしゃれする気はありましたか」

C「あった」

○「じゃあ、おしゃれする気が、全然なかったおさるは、ほかにいませんか、十一びきの中には」

生徒「いません」

○「Jざるさんはどうですか。どうして、おひげをそってこなかったの？」

J「おきゃくがいたから、待たされてはかなわないから」

○「待たされてはかなわないから。では、前に、おきゃくさんがいたのね」

F「そう」

○「そう」

A「でーもね、そのおきゃくは自分なの」

○「自分なの？　本当におきゃくはいたの？」

生徒「いない」

B「でも、かがみがあってさ、おきゃくがいるって。それに、まどとまちがえたの」

○「まどとまちがえた」

B「まどからのぞいてみて、自分がいて、そして」

A「それが、おきゃくがいると思って、それをまどとまちがえて、かがみなのに『あれー、おきゃくがいるからよしとこ』と思ったの」

○「おきゃくがいるから」

A「それだって、ほんとうは中に入ってみても、ひっとりもいないの」

○「ほんとうは、ひとりもいないの？　でもひょっとして、いたかもしれないわよ」

A「いないの」

○「どして、いないってわかるの？」

A「あのね、だってさ、えーと、はじめたばっかりのときさ、その次の日っていったでしょ？」

○「ン？　すぐ次の日じゃないわよ」

A「あのさ、はじめてすぐ来たでしょ」

○「はじめてすぐね」

A「そのときはまだ、山にはさるしかいなかったんじゃない？」

○「ほかの動物もいたわよ」

A「でもね、さるはね、まだ、はじめたばっかりでねほかのおきゃくはいなくって、一番最初に青いズボンのさるが来たの。その前にいるとはかぎらない」

○「いないともかぎらないわよ」

A「いるとはかぎらない」

○「いないとはかぎらない」

A「いるとはかぎらない」

○「じゃあ、さるたちは、十一びきのさるは、みんなとこやへ行ったのね」

生徒「行ったの」

○「では、とこやに行ったときにいたおきゃくは、みんな誰だったの？」

生徒「自分」

○「自分。ほかの動物？」

生徒「ちがう、自分」

B「かがみ」

A「だってさ。そのしょうこにさ、ほかの動物だったら、さるじゃないはずだよ」

○「さるじゃない」
A「そうでしょ？」
○「その次よ。でもね、ひょとしたら、ほかのさるが行っていたかもしれないわよ」
B「でもね、でもね、同じ顔で、かがみがあってー」
○「じゃ、これがなかったらどうする？」（絵の鏡の中のさるを隠す）
B「それがなかったらー」
○「みんな、これがなかったら、かがみを見て帰ったかどうか、ほら、どう？」
B「だれもいない」
生徒「思わない」
○「思わない？　これがないと、今度はどうかす？」（鏡の中のさるを見せる）
生徒「おきゃくがいるよ」
A「へんだよ」
○「へん？」
A「だってさ、それがなかったら、みんなさかがみになっているでしょう？　でも、いないとはかぎ…かがみだったらいないとはかぎらない」
○「ひょっとしたら、ほかのさるが来てたかもしれないわよ。かがみじゃなくて」
生徒「でもさ　でもさ」
A「ポケットも赤で同じで、ズボンでさ、そっくりなんていないよー」
○「ではね、もし、これだけ見たらどうする？（鏡の中のさるの洋服の部分を穏す）これだけ見て『あ、おきゃくがいるよ、またされてはかなわない』」
B「あのね、おきゃくがこんなこと（頭の上に手を置いている）するわけないよ」
○「したのよ、それが」
A「あのね、それでも、自分て思うなー」
○「自分だって思う」
A「だってさ、おきゃくはさ、前むいているはずだよ。うしろむくはずないんだけどな」
B「そうだよ。うしろの方のかみ切ったりするよ。だからさ、おきゃくが前むいているはずないよ」
A「前むいて本読む人いないでしょ窓むいて本読む人」
○「いない？　でも、いたかもしれないわよ、おきゃくさんだもの」
生徒「いない　いない」
A「人間みたいなとこやさんになっているんだから」
○「そうお？」
B「とこやさんだってさ、でも、もしかしたらね、前におきゃくさんむけといてね、うしろでやるときがあるかもしれない」
○「あるかもしれない。じゃ、みんなにちょっと聞きます。Hざる君、このおさるはお客があると思っていたの？　それとも自分だって思っていたのかしら」
H「おきゃく」
B「自分だって知らない」
○「知ってはいなかったのね」
B「あわててた」
○「知らなかったんでしょう？　何だと思ってたの？」
生徒「おきゃくだと思ってたの」
「あわてて、早くしようと思ってさ、あわててさ、おきゃくがいるなって、自分が気がつかなくって、おきゃくだナーって」
○「それで？」
A「来てみたら、だーれもひげをそってくる人がいないし、これはへんだぞ、おきゃくがいるんだから、だれかそってくる人がいるなー」
○「と思った。じゃ、他の人はどう？　Aざると同じ？」
C「Aちゃんと同じ」
○「でも、他にもっとない？　今のおかしいよって。Aちゃんの意見じゃ、おかしいよ、ぼくはこう思うって、おすざる君の意見は？　Aちゃんの意見は、さんばつやには、きのう、おきゃくがいたのに、来てみたらだーれもひげをそってこない。なんておかしいよ」
B「みんなかがみのせいになっちゃったの」
○「かがみのせいになっちゃった」
A「でもねー、Aねー」
B「かがみを置いてあるからね、そのかがみは、まどみたいでしょだから、まどとまちがえちゃって、あわてて、自分をね、おきゃくだと思っちゃったの」
A「さるは、あわてもんだから、洋服やひげなんかぜんぜんないの」
B「それにね、さるなんかひげがはえないでね、うんとさ、毛とかがはえてるばっかしで、ひげなんかないの」
A「あるもんあるもん」
○「えーっ、あるじゃない、ほらちゃんと」
B「でもね、お話だからあるの」
○「お話だからある。じゃ、お話の中でお話作りましょうね。ほかのおさるはいいですか。Aざるはね、みんな、おひげをそってこない。でも、きのうのとこやにはちゃんとおきゃくがあったんだし、だれも、ひげをそって

B　こないというのはおかしいよ」
「あーっ、あのこたえ」
○　「もっと、何かつかないかしらね」
生徒「ハイ　ハイ」
B　「いいたいことがあるの。おきゃくがいたんだから、その次にまたほかのさるが行ってね、ひげをそってくるはずだと思ってねみんなが、ほかのAざるとかBざるの顔を見て、ふしぎだなー」
○　「ふしぎだなー。他のさるだってひげをそってくる」
B　「一日中、そんなに、そってるわけないもん」
○　「一日中、そってるわけない。みんなは、とこやへ行ったのに、おきゃくが来ていたから帰って来たんでしょう」
B　「だからさ、かがみのせいなの」
G　「かがみから、出てくるわけないよ」
B　「だからね、かがみがなければ、みんなはひげをそってくるはずだ」
○　「かがみのせいなのね」
B　「ひげをそってくるわけで、ひげがない」
○　「はい、では、この中に入れることばは『きのうとこやにはおきゃくがいたのに、だれもひげをそってこない』これでいいですか」
生徒「いいいい」
○　「いい？　五〇点、あと半分」
A　「あのね、さるが、何でそってこなかったかというとね、かがみがあったし、でも自分の顔がなかったらね、きっと、ひげをそってくると思う」
○　「自分の顔がなかったら？　顔のないさるなんている？」
C　「ちがう、かがみの顔」
A　「かがみの顔がなくて、体や顔がなくて、そして、かがみでなくて、その本当のまどみたいな、空気のところから見たら、きっと、ひげをそってくると思う」
○　「じゃ、かにの店にかがみがなかったら、ひげをそってきたと思う。いいですか」
生徒「いい」
B　「さるはね、大体ね、かがみなんか、大きいのひろうはずないもん」
○　「だって、お話ですもの」
B　「フーン」
○　「いい？　あったんですって、かにの店に」
G　「さるがいなかったら、あんなにむずかしいもんだいは出ないと思う」
○　「あら、Gざるは、さるがいなかったら、こんなにむずかしいもんだいは出なかったと思うって」
B　「かがみがなかったら、みんなひげそってくるはずなのにね」
○　「でも、みんなもとこやへ行くでしょう？」
生徒「ハイ」
○　「かがみがある？　だけどみんなそってくるでしょう？」
A　「それはね、人間だから。人間がかがみってものを作ったんでしょ、人間が知ってなきゃ、おかしいでしょ」
○　「そう？　だから、Aちゃんはお客とまちがえない」
A　「だってさー、人間が作ったんでしょ？　作った人がわかってなきゃ、作るわけない」
○　「はい、じゃ、みんなわかった？　Aざるいいですか？　ここにある『おや、おきゃくがあるんだな。またされてはかなわない』は、だれのことば？」
「さる」
H　「青ズボンざる」
「山全員のさるのことば」
○　「みんながこう言って帰って行ったんでしょ？　こんどはね、二枚目のことばを、書いてください」
「わかんないよー」
「書けないよー」
A　「わかったもん」
B　「だからさ、先生、理由を書くんでしょ？」
○　「うーん、これ理由？」
A　「ちがう」
生徒「ことば」
○　「だれのことば？」
「さるのことば」
○　「ふしぎな理由は、だいぶわかったでしょう？　みんなの書きたいこと、言いたいことはわかった。みんな合ってるわ、あと二〇点」
I　「だめだよー、あと二〇点」
B　「あと二〇点」
○　「あと少し、がんばって下さい。ヒントをあげます。これに続けてちょうだい。ほら、さっき、みんなに見られてしまった『おやおや』これに続けて下さい」
「おやおやっ？」
「おやおやっ」
A　『へんだなー』
○　「何がへんなのかな」
A　「だから、これから、書くんではないか」
○　「さっき書いたのはけさなくていいのよ、続けて書いて。おやおやーっ、Jざるはさっきから

『おやおや』って書いてたの？
そう」
『おやおや』
『へんだなー』
「いいーっ」
「あ、そうだ、あのこと書けばいい」
（この間　五分）
○「では、Kさる、おやおや」
K『きのういた人がいる』
○『おやおや、きのういた人がいる。』
きのういた人はどこの人？
生徒「この人でさ、自分」
○「この青スボンざるが思ったとしてよ『おやおや、きのういた人がいる』どこにいるの？」
A「さんばつや」
○「さんばつや。この中でよ（二図）」『おやおや、きのうの人がいる』このほか」
A「でも、ひげをそっていないよ」
○「Bさるさん、読みましょう」
B『おやおや、みんなひげをそってこないのかな。そってこないよ。お休みだったのかな』いやちがう。あいていたのに、めんどくさいと思ったんだよ」
○「お休みだった？とこやさん。今のBさると同じ人、他にいますか」
L「えーとね『おやおや、スボンが同じのはいないぞ』
F「きのうのやつと同じのはいないぞ。きのうのやつって、誰だったの？」
生徒「自分」
H『へんだぞ。だれもひげをそってこない。いったい、どこのさるだろう』
C『おやおや、それではちょっと失礼ではないか』
○『いったいどこのさるだろうと、失礼ではないがい』ほんとに失礼ね、でも、Cちゃん、みんなおひげをそる気はなかったの？」
C「あった」
○「だけど、そってこなかったのね」
A『おやおや、へんだぞ。みんなひげをはやしている。でも、さんばつやにはおきゃくがいたのに』
○『でも、さんばつやには、きゃくがいたのに。』さあ、みなさん、おさるはみな、とこやへ行きましたね」
生徒「行ったー」
○「行ったのね、それなのに、おきゃくがあるって帰って来た。つぎの日、おたんじょう会に来た。ら、みんなひげをのばしていた」
A『へんだぞ』
○『へんだぞ、おやおや』
A『さんばつやには、ちゃんときゃくがいたのに、だれもひげをそってこなかった』
○『さんばつやには、ちゃんとおきゃくがいたのに』
G『それでは』
○『それでは』
G『それでは』
○『おやおや、それでは』それではどうしたの。それではっていうことばはね、何かがあって、そこから何かを考えたときにつかうのね。とこやへ行った。おきゃくがいた。さて次の日。こんどは、それではをつけて考えてごらんなさい」
A『おやおや……』
C「つけたよ」
○『おやおや、それでは、』Cちゃんつけた？　ア、ほんと『おやおやそれではちょっと失礼ではないか。ふしぎだなー』と思ったのよ。Cちゃん、失礼だなー、ふしぎだなー、ちょっとちがうみたい。何がふしぎだったのかしら」
（この間　三分）
○『おやおや、それでは』
H『おやおや、それでは、きのうのさんばつやに、だれもいなかったのかな』
○「あら、いたじゃない」『だれもいなかったのかな』（板書）
B『おやおや、それでは失礼ではないか。まてよ。ぼくがいったときのように、おきゃくがいたのかな』
○『きのうのさんばつやに、おきゃくがいたのかな。』Bちゃん、おきゃくはいたの？」
B「いたの、かがみで自分なの」
○「Bさるは『ぼくがいったときのように、おきゃくがいたのかな』と思ったんですって。おきゃくがいたのかな。そしたら、次の日に来てみたら」
B「みんな、ひげをはやしていた」
○「おきゃくがいたから帰ったんでしょう？　十一びきのさるがみなそうだったのね。それで『おきゃくがあるんだな。またされてはかなわない』その次の日にあつまったら」
G「ひげがいっぱいはえてた」
○『おやおや、それでは』
A『へんだぞ。おきゃくがいたのに十一びきのだれかがいたはずだ。でも、だーれもひげをそってくる人がいない。これはやっぱりへんだ』
○『だーれも、ひげをそってくる人がいない』
A『あれは、まどではないのか』

○『おやおや、だーれもひげをそってこない。でも、ちゃんとおきゃくがいた。それだのに来てみたら』

A『だーれもいない』

○『それでは』

生徒「おかしいよ」

○『それでは、おかしいよ、おやおや、それでは』さ、みんなもう一度よく考えて。おきゃくがいたから、さるは帰って来た。次の日になって、おたんじょう会に来てみると、みんなひげをのばしている。『おやおや、それではおかしいよ、おきゃくがいたのに』紙を出して下さい。

Fざるさん『おやおや、それでは、みんなひげをはやしているなら、きのうのおきゃくは、だれだったのでろう』みんな、いいですか？　Fざるはこう思ったんですって（板書）」

生徒「あー」

A「こたえ、おしえてくれるの？」

○「おしえてあげる。さ、あの中のどれがいいかな？　Bざる、Cざる、Hざる『きのうのさんばつやには、だれもいなかったのかな』　Aざる『おやおや、それでは、おきゃくがいたのかな』

Fざる『きのうのおきゃくはだれだったのだろう』　さあ、どれがいいでしょう」

A「Fざる」

○「Fざるのでいいですか？」

生徒「いい〳〵」

A「何で、みんな、私のまねすんのよ」

○「Fざる、自分のでいい？」

A「自分のがいい」

G「どうして『おきゃくがあるんだな』なの『いる』んじゃなくて」

○「おきゃくがある。おきゃくがいる。ほんとね、どっちがいいかしら」

G「いるのほうがいい」

A「あるのほうがいい」

G「おもちゃがあるっていうときはあるを使うのにね、人はいる」

○「どっちが良いかしらね」

○「おきゃくがあるにするか、いるにするかは、この次に考えましょう。いい？　きょうは、こっちをさきにね。『またされてはかなわない』といって帰ってきたんでしょう？　その次の日、みんなのひげはのびていた。『おやおや、これはおかしいな』何が、おかしいの？」

C「わたし、わかっている。ひげをそってこないから」

○「Fちゃんは『きのうのおきゃくはだれだったのかな』

A『わたしは、おきゃくがちゃんといたのにだれも…　では、あのまどはなんだろう』

○『あのまどは何だろう。おきゃくがいた。おきゃくがいたのに、だれもひげをそってこない。』Aざるは、とちゅうまで、Fちゃんとにてるわね。ほかのおさるは？　自分のがいいの」

「いいですか、この次にもうちょっと考えましょうね」（カードをはる）

B「あー見いちゃった。『おやおやきのうのおきゃくは、だれだったろう』」

A「あー、やっぱし、Fざるのがあってた」

○「さあ、ここに行くまではわかったわね。おさるが、何を考えたかわかったでしょ」

子どもたちの反応とその展開との整理

Aの思考の過程を辿ってみると

(1)『おきゃくがいたのに、ひげをそってきた人がいない』

←

(2)『おやおや、変だぞ。みんなひげをそっていない。　でも、さんばつやにはおきゃくがいたのに』

←

(3)『変だぞ。十一びきのだれかがいたはずだ。でも、だーれもひげをそってくるものがいない。これは、やっぱり変だ』

となり、

「おきゃくがいた」

「ひげをそってきたものがいない」

の二つの間に起きる矛盾に、疑問を感じている。また、このAの場合、初めから、終り迄この矛盾を問題点としており、(1)から(3)へと進むに従い、自分自身で、その疑問を強めていっている。つまり、問題点は常に、

「おきゃくがいた」

「ひげをそってきたものがいない」

の二つの事実の関係に於いて生じ、(1)では『のに』を用いているところからそこにある矛盾を、さるのことばとしてではなく、自分の疑問として、自問自答していると見受けられる。単に『のに』で逆態の形を取った(1)から、理論の確認を続けていくに従い、疑問は『でも』『のに』と、益々意識され、ていき、(3)に至ると、確かに「変だぞ。十一びきのうちだれかがいたはず」と理屈に合わないのは何か、徐々に焦点が合わされていき「やっぱり」と、確認されるのである。

また、Bは

(1)『きのう行ったさんばつやに、同じ顔して同じ洋服きたおきゃくがいた』

←

(2)『おきゃくがいたんだから、そのつぎにきた、ほかのさるが行き、ひげをそってくるはずだと思う』

（さるが疑問と、自分の疑問とが区別されずにいる）

←

(3)『おやおや、みんな、ひげをそってこないのかな。そってこないよ、お休みだったのかな。いや、ちがう、あいていたのにめんどうくさいと思ったのかな』（ここで、さるの立場に立てた）

←

(4)『おやおや、それでは失礼ではないか。まてよ。ぼくが行ったときのように、おきゃくがいたのかな』

となっている。(1)では、単に二枚の絵を見比べて「同じ様子のさるがいた」（の形はとっているが、自分の観点から答えられていることから「きゃくと見たのは、実は、そのさるである」ことが、意識されていないことが解り、これは(2)迄続いている。次に(2)の「おきゃくがいたんだから」には「一日中いるわけがない」の意が強く

「おきゃくがいたのに、ひげをそってきたものがいない」

の意味よりも「ほかのさるも行くであろう」に近い。(3)、(4)に至っても

「おきゃくがいた」

「ひげをそってきたものがいない」

の形が、さるの（かつ、自分の）不思議さのポイントであると感じはしたものの、そこに生ずる矛盾よりも「なぜそってこなかったか」に、より強く疑問を抱いている。但し、ここでは、さるの誤ちを認めることが出来ているので

「おきゃくがいた」

「ひげをそってきたものがいない」

の関係は、「のに」ではつなげることが出来ず、「ので」と、原因の域から出ることが出来なかったと思われる。

次にCであるが

(1)『ひげもじゃなので、そってくれば良いのに、そってこないからおかしいよ』

←

(2)『おやおや、それでは、ちょっと失礼ではないか』

の形をとっている。この場合、(1)の「おかしいよ」は

「おしゃれする気はあった ー おきゃくがいたからしなかった」

と述べているにも拘らず

「おきゃくがいた」

「ひげをそってきたものがいない」

の疑問の「おかしいよ」には発展せず最後迄

「失礼ではないか」

と

「誕生会」

「ひげをそってきたものがいない」

の形をとることから、この児童には、誕生会のイメージが大きく影響していることと思われる。

以上、三名の思考過程、また他の児童の発言を見ても、幾回かの疑問点の確認、論理の積み重ねを行ったにも拘らず、結局、初めの答え方（受け取り方）から進展はしても、その姿勢は変化しないことが解る。一つの発言から自分でも納得しつつある方向に向かいながらも、最後には、初めに取った姿勢へ戻る場合もあり、このことから、児童が、一旦取った姿勢（構え）をいかに変え難いかがはっきりする。ここで、正しい論理の組み立て、思考の広がりへの、児童が、自分以外の構えを認めることができ、かつ、それに順応できることの作用を感じ、重要性を知ることができる。

この授業での発言中、特に目立ったものとして

イ「おきゃくがいた」

ロ「ひげをそってきたものがいない」

の二つの文を続けることばが挙げられる。最も多かったものが、

「のに」であり、「ので」「から」「でも」「けれど」で、そこから「やっぱり」「はず（なのに）」が生まれてくる。

そこで、思考の過程と、これ等のことばとの関係を、典型的なタイプである、A、B、Cを中心に追ってみると

○「イ」ので「ロ」（↑どうしてそってこないのか）

○ひげもじゃなので、そってくれば良いのに、そってこないからおかしい

（↓それでは失礼ではないか）

○「イ」だから、他のさるもひげをそってくるはず（〜だれかが、ではない）

○「イ」のに「ロ」

○「ロ」でも「イ」のに

○だれかがいたはず、でも「ロ」やっぱり変だ

○それでは、あのきゃくはだれだったのだろう

となり、子供には、逆態よりも、順態の接続詞の方が、使いやすく、また、そのつなぎ方から、その子の姿勢を伺えるということが出来る。児童の思考過程で、ことばと構えは、どちらが先に決まるか定かではないが、適切なことばから、正しい論理が生まれてくると思われる。これに加えて、発言中の

「いるとはかぎらない」

について、再考してみたい。

これは、さるが誤まっていることを

意識させようとした余りに、鏡に写ったさるの姿をはっきりと描きすぎたことに始まる。却って不自然な論理の発展を強いた感がしたので（さるが誤っていると認識せず、視覚でのみ意識したのではないかとの）本論からは離れたが、

「おきゃくは本当にいたのか」

の発問に対するやりとりの中で、

生「本当は中に入ってみても、ひっとりもいないの」

T「でも、ひょっとしているかもしれないわよ」

←（略）

生「とこやははじめたばっかりで、ほかのおきゃくはいなくて、一ばんさいしょに青いさるが来たの。その前にいるとはかぎらない」

T「いないともかぎらない」

生「いるとはかぎらない」

T「いないともかぎらない」

と、発言されている。結局「さるが間違えている」というイメージが強すぎた為に、その他の場合を想定出来なかったのであるが、これが、やりとりが繰り返され、視覚による意識を消す為に、鏡の中のさるの姿を隠したとき

T「おきゃくがいるよ（隠す）」

生「変だよ」

T「へん？」

生「だってさ、それがなかったら、みんなかがみみたいになっているでしょう？ でも、いないとはかぎ…かがみだったら、いないとはかぎらない」

となるのである。このとき、さるが鏡をまどと間違えているのではないかとも受けとられていたので、この子は、さるの思考過程を

A かがみ ー 中が見えない ー ほかのきゃくがいるとも、いないともかぎらない

B まど ー 中が見える ー ほかのきゃくがいるかいないかはっきりする（この児童はいないと取った）

と、受け取った上で、Aを選んだと思われる。しかし、そうであれば「だから」と順態で接続しても良いのだが、「でも」でつないでいる。これは、Aであったときの、自分の発言との比較が、平行して行なわれていたからに相違ない。

この「いるとはかぎらない」のことばは、解答そのものからは外れたものであるが、この子の思考法、論理の展開に於いて、見逃すことが出来ないものである。

付記

右は、東京・聖徳学園英才小学校（一年次生・一学年相当）における授業よりまとめたものである。

その二

テスト問題

このお話は、とちゅうでとまっています。あとをつづけてまとめて下さい。

さるのさんばつ

かにが、とこやを、はじめました。みせに大きなかがみを、すえました。

さるが、さんばつやにやってきました。あしたは、このさるの、たんじょう日です。みせを、のぞいて

「おきゃくが、あるんだな。またされてはかなわない」といってかえっていきました。かがみにうつったじぶんのかおをみて、おきゃくだと、おもったのです。

かには、おきゃくがこないのでぶくぶくと、シャボンばかり、といっていました。

こんどは、べつのさるが、きました。あしたは、さっきのさるのたんじょういわいに、いくので、ひげをそりにやってきたのでした。

このさるも、かがみにうつったじぶんのかおをみて

「おや、おきゃくがまってるな」

というて、かえって、いきました。

ともだちのさるが、つぎから、やってきて、かがみをのぞいては

「おや、おきゃくがまってるな」

といって、かえっていきました。

つぎの日の、たんじょういわいに、さるたちは、みんな、ひげをもじゃもじゃさせてあつまってきました。

「おやおや、

調査校・学年・人数

幼稚園

第二押上幼稚園（東京）　三十名

一年生

一之江第二小（東京）

一年一組　四十名

一年二組　三十六名

二年生

三ツ沢小（横浜）　四十一名

長谷戸小（東京）

二年一組　三十八名

二年二組　三十六名

二年三組　三十四名

三年生

屏風浦小（横浜）

三年一組　四十名

玉川学園小学部（東京）

三年花組　三十二名

四年生

玉川学園小学部（東京）

四年竹組　三十六名
四年梅組　三十五名
上瀬谷小（横浜）
四年一組　二十八名
町田第五小（東京）
四年一組　四十二名
五年生
二子玉川小（東京）
五年二組　三十五名
上菅田小（横浜）
五年　七十五名
六年生
上瀬谷小（横浜）
六年一組　二十七名
上菅田小（横浜）
六年　九十五名
調査対象人数合計　七百名

◆ 分析の結果とその考察

先のその一における〝資料の適用〟の項で松村氏がとり上げるところにふれる回答をしたのは七百人中十三に限られた。テスト問題にある、お話作りという誘導が、子どもたちを、本研究の求めるところとあまりにも遠い、あらぬ方に追いやってしまったのかとも、思われ、厳密な意味では再検討再調査しなければならぬ反省を持ったが、それにしても惨たんたる結果であった。十三事例の特徴に従いA・Bにわけて次にそれを掲げ補筆してみる。

A　横浜・上菅田小六年女子

「おやおや、みんなひげをそってこなかったのかい」

「いや、ひげをそりに、とこやまではいったんだけど、おきゃくがいて、またされてはかなわないと思って、家に帰ったんだ」

「それにしては、おかしいな。みんなひげをそっていないじゃないかい。どういうわけだ」

さるたちは、みんなで、いっしょうけんめい考えましたが、どうしても、わからなかったということでした。

A　東京・玉川学園三年女子

「おやおや、みんな、ひげもじゃだな。どこのとこやへ行ったんだ」と、たん生日のさるが聞きました。みんなは、口をそろえて「かにのとこやだ」といいました。「そうか。なら、おきゃくはいたか」と、また聞きました。

「いたよ。いたよ」と一人がいうと、「ぼくも」「ぼくも」といい出しました。「では、いついっても、おきゃくはいたわけだ。ならば、だれか、うそをついているだろう」「どうして」

「だって、ぼくのたん生日には、さる村のぜんぶの人をよんだんだ。とこやにきゃくのさるがいるということは、だれかは、ぜったいに、とこやへ行って、ひげをそったはずだ」

この二例に似たパターンをもっているものは、他に二例（六年女子・五年女子）を数えるまでであった。

B　横浜・上菅田小・五年女子

「おやおや、きみもとこやに行かなかったのかい」

「うん、そうなんだ。かにのとこやに行って見ると、他のさるがまってたから、またされちゃかなわないと思って帰ってきたんだ。」

「ぼくも」「ぼくも」

さるたちは、口々にいいました。一びきのさるが、

「おかしいぞ。さんぱつしているさるが、一びきもいないじゃないか」

そうです。このさる村では、だれかのたん生日になると、村全員のさるがいわいに行かなければならないのでした。

「そうだ。かにのとこやに行って見よう」

さるたちは、かにのとこやにいそぎました。

かには、まだ、シャボンをといていました。

さるたちは、ドアをあけて、どやどやと、とこやに入り、おもわず、

「あ！」っといいました。

前をみると、自分と同じさるが何びきもいました。さるたちは、おどおどした声で、かにに、たずねました。

「こ、これは、な、なんだい」

かには、大わらいしていいました。

「これは、カガミという物だよ。ほら、自分がうつっているだろう。つまり、物をうつす物さ」

「そうか。それで、おきゃくがこなかったのか」

さるたちも、カニの話をきくと、大わらいしました。

そして、家に帰ると、たのしい、たのしい、たん生会をはじめました。

かにのとこやも、それから、たいそう、もうかったそうです。

B　横浜・上菅田小・六年男子

子ざる四「おやおや、きみたちは、ばくのたんじょう日に、なんでそんなに、ひげをはやしてくるの」

子ざる一「だってとこやさんへいったら、たくさん、おきゃくがいたんだもん」

子ざる二「ぼくもそうだよ」

子ざる三「ぼくもだよ」

子ざる四「みんながとこやにはいらないとすると、だれがはいっていたんだろう。このほかに、さるは、いないのに」

子ざる一「おばけかな」

子ざる二「いやいや、悪まだよ」

子ざる一「よし、こんばん、そのとこ

やへいってみようよ」

二・三・四「さんせい」

子ざる四「じゃあ、こんばん七時、うらのあき地でね」

一・二・三「オッケー」

ー さて、時間がたってー

子ざる四「さて、みんな、あつまったか。」

一・二・三「オー」

子ざる四のしきで、みんな、元気よく出発しましたが、とこやの前に近づくにつれて、子ざる一・二・三・四の足は、ふるえてきました。そして、とうとう、とこやの前にきました。

子ざる一「いるいる。四ひきもいる」

子ざる二「石をぶつけてみようよ」

一・三・四「よし、そうしましょう」

ガチャン！

かにが、あわてて、でてきました。

かには、さるに、「どうしたの」ときくと、さるたちは「おばけをだいじしたの」と口々にいいました。おばけは「どこ」とかにがきくと、さるたちは、小さな手で、こなごなにくだけたかがみをさしました。すると、かには大きなこえをだしてわらいました。そして、さるたちは、あれは、かがみだとか、前にいる人はうつるということをきき、さるたちも、わらいました。きょうのたんじょう日は、とても、おもしろかったですね。　おわり

以上であるが、Aに属すると思われる事例が、学年段階では、三年生七二人中の一人、五年生一一〇人中の一人、六年生一二二人中の二人のような表われ方をしている。

また、Bについては、二年生一四九人中の一人、四年生一四一人中の一人、五年生一一〇人中の二人、六年生一二二人中の四人のような表われ方をしている。

整理担当　飯　住　良　夫